

# 国語科における授業研究

## —インフォームドコンセントを視点とした指導計画の再構築—

里見 達也  
(帝京学園短期大学)

### I. はじめに

医学分野で多く用いられる「インフォームドコンセント」とは、医師が十分な情報を患者に与えて、患者自身が治療方針などを選択していくシステムのことを言い、「説明と同意」と訳されている。

現在、子ども一人一人の多様な教育的ニーズに対する評価の在り方が見直され、目標標準評価や個人内評価を重視した評価規準、評価方法等の研究開発が進んでいる。

教育現場においても、評価の観点から、教師と子ども・保護者等との間で、教育内容において十分な「説明と同意」が必要になっている。

太田（2004）は、子どもの生きる力を伸ばすためには、個別の指導計画を教科別の学習に活かすことが教師に求められているとしている。そこで重要な点として、個別の指導計画に記載された指導目標をもとに授業目標を具体的に立てることや、明確に評価を行うことだと指摘している。また、子どもが学習場面で獲得した力は、実際の生活の中で発揮されることが期待されていることから、教師には生活に活かせるように学べる教材・教具の工夫が求められていると述べている。

また、飯野（2004）は、授業研究の上で指導仮説を立てることは有効であり、指導理念の具体化とともに教員間の共通理解にもつながると述べている。

徳永（2004）は、障害のある子どもの学習評価について、将来的には特殊教育であっても教育課程や評価の枠組について、基本構造は小・中学校のものと同一ものとする、子どもの学習について教師が高い期待をもち、かすかな可能性にチャレンジし、その評価を工夫する、計画や評価に保護者が参画するだけでなく、本人の参画を工夫するなどの課題を挙げている。

本研究は、子どもたちの要望を重視しながら自分たちで見つけ、友だちと協力して一つの物語作品をつくり上げていく国語科の授業実践を通して、評価を考える際に大切な指導目標の再構築について、インフォームドコンセント（説明と同意）という視点から探っていくものとする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象学級の様子

#### (1) 対象学級及び対象児童

医療施設併設の養護学校小学部低学年学級に在籍している2～3年生の7名

#### (2) 教育課程の種類

小学校学習指導要領に「準ずる」教育課程及び「下学年適用」の教育課程

#### (3) 学級の特徴

- ・手術・訓練が主な目的で短期間（在籍期間1～8か月）が多く、転出入が激しい。
- ・小学校の通常学級，特殊学級（心身障害学級），養護学校在籍の児童と学力の点で幅広い。
- ・日常的な会話が成り立ち，指示も通りやすい。
- ・独歩や車椅子を自由にこげる児童が多い。
- ・母子分離がなかなかできていない場合が多い。

#### (4) 学級の目標

各児童の「個別の指導計画」から中心的な課題を抽出して関連性（図1参照）を整理

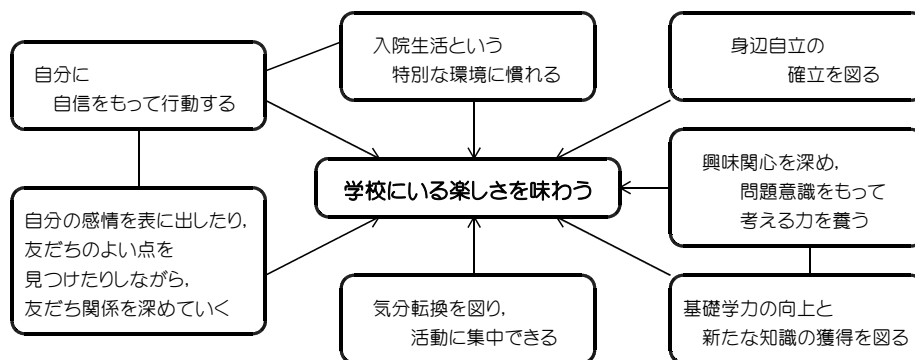


図1 学級の目標

#### (5) 指導方針

- ・自分に自信をもって行動できるよう，各児童の興味・関心のある課題を選び，みんなに発表できる場を設定する。
- ・「なぜ，こうなるのか」といった問題意識をもち，考える力を養うように，日常生活にあるものを題材に，その必要性を考えていく場を設定する。
- ・入院生活という特別の環境における児童の心理的安定を図るため，学校にいる楽しさを重要視し，また面談や連絡帳を通して，学校の活動内容や児童の様子を伝えて保護者に対しても安心してもらうように配慮を行う。さらに，気分転換が図られるよう，一つのことに意識を向けるような声かけを行うようにする。
- ・身近自立の確立のため，児童ができる範囲を見極めた上で，学習準備や移動，トイレ

時を中心に、自分自身で行動する場を設定する。

- ・基礎学力の向上を図るため、特に国語・算数を中心に、各授業のはじめに漢字や計算の時間を設定する。また、新たな知識の獲得については、週末に1週間のまとめを行い、確実性を持たせる場を設定する。

## 2. 国語科の指導計画の概要

### (1) 国語科の目標

国語に対する関心を深め、人に伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を働かせながら楽しく物語や説明文等を読み進める。

### (2) 国語科の指導計画（抜粋）

表1 国語科の指導計画（第2学期）

月 グループ	9月	10月	11月	12月
2年生の学習内容を中心としたグループ	「物語」づくり		・物語「かさこじぞう」 ・詩「いろいろなやさい」	・説明文 「もうどう犬の訓練」 ・作文
3年生の学習内容を中心としたグループ			・物語「手ぶくろを買いに」	「友だちのこと」 「ものの作り方」

### (3) 本単元の概要

10月の学校祭における舞台発表に向けて、9月の本単元では次のように目標を設定した。

- ・目標：ある一つの「物語」からそのあらすじをとらえ、登場人物の言動を楽しく演じてみる
- また、授業計画（総時数11時間）については、以下の通りに設定した。
- ・第一次：「物語やその表現方法を話し合おう」（1時間）
  - ・第二次：「物語を読んでみよう」（7時間）
  - ・第三次：「物語の一部を演じてみよう」（3時間）

## 3. 分析方法

授業の展開をもとに、インフォームドコンセントの視点から整理する。

- ・授業の展開とインフォームドコンセントの関係
- ・授業計画の再構築

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 授業の展開とインフォームドコンセントの関係

第一次「物語やその表現方法を話し合おう」では、「劇や紙芝居、絵本の中で演じてみたい物語はないか」を子どもたちに提示した。これは、授業場面におけるインフォームドコンセントの「要望の聞き取り」である。同時に物語の選定という「選択」の場の提供で

もある。

その話し合いの過程では、なかなか子どもたちから意見が出るような雰囲気がかげえなかった。これは、「要望の聞き取り」の際に、情報の内容や与え方が不足していたものと思われる。

次に「例えば『シンデレラ』などはどうか？」といった提案をしてみたところ、「白雪姫」「三匹のこぶた」などの意見が少しずつ出てきた。これは、情報の内容が分かりかけてきたため、「Yes」の反応と思われる。

話し合いを進めていくうちに、「たまごっち」という意見が出た。「たまごっち」とは、当時子どもたちの間で流行したゲームである。これは、子ども側からの情報提供である。

この情報提供を生かそうと、「たまごっちものがたり」などの本があるのかと子どもたちに質問してみたが、子どもたちは「ゲームの攻略本ならあるけどね」との答えが返ってきた。これは、教師と子どもとの情報の交換であろう。

物語の選定という「選択」の回答を求めようと、「では、どうしたいかな？」と問題を投げかけてみたところ、「つくればいいじゃん」という子どもが現れた。これは、子どもからの「選択」の「回答」である。

授業計画では、既成の作品から子どもたちは選出すると考え、また低学年のため「物語の作成」という段階を想定していなかった。これは、教師が与えた情報の方向性が子どもの情報の方法とずれており、また子どもの実態把握の甘さが露呈したものである。

そこで、「背景や展開」の進め方や文章の表現方法から物語の作成の難しさを指摘した。これは、情報の与え方のずれ、つまり「既成の作品から選択する方法」へ修正したものである。

子どもたちの要望は強く、「せっかく自分たちで演じるなら、自分たちでつくった物語をしたい。」との発言でまとまりを見せていった。これは、先生側からの情報の提示に対する「No」の意思表示とみられる。

そのため、子どもたちの意欲を認め、授業計画の修正を念頭に、「物語の作成」の方法について話し合うこととした。これは、子どもたちの意思表示を確認し、子どもたちの「要望」に応える方向へと軌道修正したものである。つまり、「既成の物語」ではなく「物語の作成」へと修正したのである。

子どもたちの様子を踏まえながら、子どもたちにどの段階まで何を学習してもらいたいかを選定している過程である。「物語の作成」は、文章の構成はもとより、話の流れを矛盾なく構成していくものであるため、低学年では、一体どの部分にスポットを当てて展開していくかという問題となってくる。

そこで、まずは「物語には何が必要なのか？」について意見を出すように提示した。これは、子どもの物語の構成に対する理解度を確かめるための聞き取りと考えられる。

「登場人物」との意見が先に出た。これは、子どもが物語の構成に対して重要と認めているものを回答したものである。つまり、教師の聞き取りに対して、その内容を理解し、

かつ「Yes」という反応を返したものである。

「そうだね。でも、それだけで物語はつくれるの？」の問いに「場所も必要」との意見や「たまごっち」が行うことなどが出てきた。これは、さらに子どもの物語の構成に対する理解度を探る意図がある。

「あっ、そう言えば今のは全体の流れと言うのかな？そういうのも決めなくちゃね。」との意見が出された。これは、教師の意図を理解し、さらなる明確な「Yes」を出そうとしている様子であろう。

そこで、「そうね。そういうのを、なんて言うのかな？」と聞いてみると、しばらくして「あっ、そうだ。『あらすじ』って言うのかな？前に先生が教えてくれたよね。」との答えが返ってきたのである。これは、今まで学習した物語に対するとらえ方をフィードバックさせるための場の提供と、それに対するの明確で的確な「Yes」である。

「そう。物語を読むときには、まずどんなお話だったかっていう『あらすじ』を考えるといいよね。」とその補足を行った。これは、「物語」に対する情報の内容を提示しているものである。

結果として①登場人物の選定、②あらすじ、の順に話し合いを進めていくことになった。

まず、登場人物の選定では、「たまごっち」に出てくるものの中からあげてもらおうよう提案した。これは、「選択の場の提供と的確な選択肢の設定」に相当するであろう。

「まめっち」「みみっち」「おばけっち」など多数のキャラクター名が出てきた。これは、子どもが選択の場を与えられ、かつ明確な「Yes」のもと、選択肢を選定している過程であろう。

次に、「こんなにたくさん登場して、みんなで演技ができるかな？」との質問を出してみた。これは、「選択肢の選定」に対して情報を与えたことを意味する。

「いち、に、さん…そっかあ、先生入れて8人だから、やっぱこれじゃ、多いよ。」「でも、二つの話にしたら？」「そんなの、覚えられないよ。」などのやりとりが交わされた。これは、教師の情報を受けて、どのように対応したよいかを考えている場面であろう。

「先生、どう思う？」と子どもたちから質問されたため、「そうだなあ、先生も覚える大変だからね。」と返してみた。これは、子どもたち自身で考えて答えを出そうとしているが、どのように進めたらよいか分からず、その道筋のヒントを教師に求めたものである。それに対して、子どもの立場に立って、そのヒントを与えているものである。

「そっかあ、覚えなくちゃいけないんだもんなあ。」「やっぱり、登場人物は8人にしようよ。」「それでいいよね。」「うん。」といった流れで、話し合いはまとまっていった。これは、教師のヒントを受けて、子どもたち自身が自ら「選択」して結論を導いた過程である。その結果、自分たちがやりたい役に手を上げる方法で登場人物の選定を行った。

あらすじであるが、「どんなお話にしたいのか？」という聞き方で話を切り出してみた。これは、子どもたちに対する「要望」を聞くものである。

「そうだ。『おばけっち』が出てくるから、『おばけっち』をやっつける話にしようよ。」

「それがいいよ。」「じゃあ、どうやってやっつけるの？」等の意見が出てきた。これらは、子どもたちの「要望」と見て取れるであろう。

そこで、「ちょっと、まって。それってあらすじかな？」と口を挟んでみた。これは、教師が求めていたものに対して子どもたちの「要望」の方向性がずれてきたため、修正しようとする試みた結果である。

子どもたちには、何をどうしたらよいか分からない様子であった。これは、教師の説明が不十分で、子どもは回答を出すにも出せない状態だと思われる。

そのため、「例えば、物語のあらすじを考えるのに、『いつ』、『どこで』、『だれが』、『どんなことをした』、なんてまとめていくのがよいと思うよ。」と黒板に書きながら提案していった。これは、子どもの戸惑いに対して、情報を提示したものだと思われる。

子どもたちは、黒板の提示にしたがって話を展開していくようになった。「昔々っていうのはどう？」「うん、それにしよう。」「じゃあ、次に『どこで』だから…公園は？」「そうすると、『たまごっち』は怪獣だから怪獣公園にしよう。」「次に、『だれが』は『まめっち』たちだし、『どうした』はさっき言った『おばけっち』をやっつけるんだね。」といった話をつくるようになった。これらは、教師の与えた情報をとらえて、その提示に沿って回答していくことで、明確な進むべき道が見えてきたということであろう。

「では、『まめっち』たちは最初からみんな一緒に公園にいたの？」と聞くと、「そうだな、一人ひとり会うのがいいよ。」「じゃあ、順番に友だちになっていくのがいいよ。」との意見が出た。これは、進むべき道が見えてきたために、さらに明確な方向へと進めるよう、選択肢を提示したものである。

こうして、「昔々、怪獣公園という場所で『まめっち』をはじめ7人の子どもが出会い友だちになり、怪獣公園を探検し、『おばけっち』をやっつける。」というあらすじが完成した。

このように、自分たちでできることを見つけいく授業では、教師と子どもたちとの間で「説明と同意」が繰り返されながら授業が展開していくことになる。その際、教師は情報の選択と提供を、いかに用意できるかが重要になってくるであろう。

## 2. 授業計画の再構築

授業の展開では「物語を作成する」ということになったが、「物語を作成する」という学習内容は高学年以降の学習内容を含んでいる。そのため、対象児童の学習内容に応じ、小学2・3年の学習内容に照らし合わせ「物語のつながり」や「文章を構成する上での主語・述語の意識」といった学習内容を盛り込んで、次のように目標や指導計画を再構築することとした（表2・3参照）。

このように指導計画を再構築する中で、ただ授業の展開に任せて教師と子どもたちとの間で行われた「説明と同意」をもとに行うのではなく、対象児童における当該学年の学習内容も念頭に再構築していく必要がある。

最終的には、「みんなの前で発表したい」との意見が広がり、他のクラスの児童に見せたり、学校祭当日の昼休みに家族の前で披露したりする機会を自分たちで設定する方向に展開していった。これは、子どもたちの中で協力してつくり上げたという充実感が芽生えた結果だと思われる。

表2 ねらいの再構築

構成前の目標	再構築した目標
ある一つの「物語」からそのあらすじをとらえ、登場人物の言動を楽しく演じてみる	話し合い活動を通して、自分の意見をもち、それを発表し、また、物語のつながりを意識して文章の構成、特に主語・述語を意識して考え、他の友だちの前で楽しく演技してみる

表3 指導計画の再構築

当初の指導計画	再構築した指導計画
○第一次：「物語やその表現方法を話し合おう」（1時間） ○第二次：「物語を読んでみよう」（7時間） ○第三次：「物語の一部を演じてみよう」（3時間）	○第一次：「物語やその表現方法を話し合おう」（1時間） ○第二次：「物語をつくろう」（10時間） ○第三次：「物語をみんなの前で演じてみよう」（3時間）

#### IV. まとめ

このように、子どもたちの要望を重視しながら自分たちでできることを見つけ、友だちと協力して一つの物語作品をつくり上げていく国語科の授業実践を通して、教師と子どもたちとのやりとりの中に、いかに子どもの要望をとらえ、いかに適切な情報の内容を適切なときに与えられるか、つまり、インフォームドコンセントの「説明と同意」が授業展開のポイントの一つであることが見えてきた。

また、教師は情報を子どもたちが理解できるように十分な説明を行い、その上で子どもたちが出した「Yes」「No」の意思表示をしっかりと受け止めることが大切である。

今後は、インフォームドコンセントで得られた教師と子どもたちとの間で行われた「説明と同意」に基づいて構築された指導目標をもとに、教育評価の在り方を検討していく必要がある。

#### 文献

- 1) 安藤隆男 (2002) 障害児教育における授業研究の視点と方法. 肢体不自由教育, 156, 4-10.
- 2) 飯野順子 (2004) 肢体不自由教育への希求. ジアース教育新社.
- 3) 太田正己 (2004) 教科別の学習における支援の在り方. 発達の遅れと教育, 565, 4-7.
- 4) 徳永豊 (2004) 評価の動向と特別支援教育. 肢体不自由教育, 167, 4-11.
- 5) 文部省 (1999) 小学校学習指導要領解説 国語編. 東洋館出版社.